

男の仕事場

課題も評価もない、自由な創作教室

陽のさしこむ明るいアトリエに入ると、壁一面にありとあらゆる色彩があふれています。たくさん色鉛筆や絵の具、カラフルなジエルが並べられ、空き箱やリボン、テープなどの工作材料もいっぱい。大人までワクワクしてしまうようなこの空間が、丹原さんの主宰する「子どものアトリエ七星」です。

やってくる子どもたちは、材料と道具を好きだけ使って、自分の思うように制作に取り組みます。「今の子どもたちは与え



丹原史晶さん 子どものアトリエ七星

Tambara Fumiaki

1974年岡山市生まれ。岡山県立大学情報工学部卒業後、ナカシマプロペラに就職。子どもをもったことを機に、造形や絵画を通じて子どもと関わる現在の活動を始める。今年度から小学校のPTA会長も務め、多忙な日々。

られる環境に慣れすぎているし、評価社会と言われる中において、なかなか自由な発想をすることができにくくなっているんですね。小さい頃から、自分でしっかり考えて表現する経験が必要なんです。結果じゃなくて試行錯誤する過程を見守り、ほめてやることで、子どもは自信をつけ、他のことにもどんどん意欲的に取り組めるようになるのではないのでしょうか。

アトリエではまた、子どもの気持ちを素直に表す手段として「色」に注目し、どんな色使いでどう表現するかを見て心を読

み解こうとする「アートセラピー」も取り入れていきます。

自分の気持ちを出すことの大切さ

元々は企業のサラリーマンだったという丹原さん。まったく異なる分野への転身は、自身の子どものできたことがきっかけでした。「毎日忙しくてほとんど子どもに関われない、いわゆる典型的な父親をやるしかなかった。親の役割ってなんだろうと思っただんです」。アトリエの開講に至ったのは、なによりも自分の子どもに与えてやりたいことを考えた結果。非常勤で会社員を続けながら、アートセラピーを学び、保育士の資格も取って「子どもが自分の気持ちを自由に表現できる場所づくり」を実現しました。

子どもたちの作品からは、いろいろなメッセージや、成長する姿が伝わってくるのだそう。つらい体験をした子どもも、絵や造形などなららかの表現で「アウトプットする」ことによって心の荷を降ろすことができるのだといいます。心を解放した子どもたちが見せるいきいきした表情を糧に、丹原さんはさらにNPO法人の設立など活動の幅を拡大中。創造力豊かな次代の担い手を育てています。

P

